

令和七年度 お茶の水女子大学 文教育学部
 帰国生徒・外国学校出身者特別選抜 試験問題

言語文化学科(中国語圏言語文化プログラム)

次の文章を読み、後の問いに答えよ。

友人と朋友の間にはいかんともしがたいほどの意味の違いがある。朋友とはたんなる友人のことではない。それは、相手に対し何でもやってやる、身も心も相手に預ける関係であり、もちろん中国でも人と場所により大きなズレはあるものの、少なくとも日本の友人と比べるならば、断じてそうである。ぼくも含めて、中国を訪れた少なからずの日本人が、熱い人間関係にへとへとに疲れ果て、やがて人付き合いを敬遠するようになる。しかも、利害関係のない所に朋友はなかなか生まれてこない。日本人からすれば、中国の朋友は打算的であり、かつ日本の意味での個人主義が欠如した前近代的な関係に映るだろうし、逆に中国人からしたら日本の友人ほど、当てにならぬ、どうでもいい、冷酷な存在もないであろう。

たとえば、日本にいる時のぼくならば、誰かから百万円を借りたい時に最初から友人に頼もうとは思わない。それは親しい友人に負担をかけてはならぬという配慮であって、こうしたことも含めて友情だと考えている。けれども朋友だとそうは考えない。カネを借りるなら、まずは親しい人ということになる。それも、百万円、一千万円だとか途方もない額を借りたりすることもなんら珍しくはない。朋友とはつまりそういう関係である。朋友になったら最後、彼はとことんまとわりついてきて、やれ家に上がれだ、飯をご馳走するだ、さんざん引っ張りまわしたあげくに、今度はカネを貸せだの、日本行きビザの面倒を見て欲しいだの、執拗にねだり始める。たかが一度だけ食事をした間柄でも、そうなることが多々ある。

他方で、朋友が至れり尽くせりであることの裏返しとして、アカの他人には冷酷なまでに無情である。あるいはアカの他人に冷酷な社会だからこそ朋友の絆が強いとでも言うべきか。旅行者が出会うものと言えば、物を買おうというごく単純なことでも怒られなければならない殺伐とした世間と、打算目的でやたらめった近付いてくる、うっとうしい朋友だけなどということにもなりかねない。

中国という国になんら関心を持たないまま足を踏み入れてしまったぼくにとって、中国に関心が芽生え、さらに、本当の意味での中国の旅が始まったのは、むしろハルビンから上海経由で日本に帰った後からだ。関心とは、たとえば、劉小飛がぼくに残していった宿題「ありがとうを言うな」を、自分なりに実践してみることだったと言えるかもしれない。ぼくには、他人に心を預けようとしなない閉鎖的な気質があるのではないか。日本語の「友人」にはなれても、「朋友」にはなれないのではないか。ぼくの中のそういう気質にこそ、東京で息苦しい疎外感を抱く理由があり、あるいは、息苦しさそのものを形成しているのではないかと。

朋友と友人の違いは、中国を訪れた日本人ならば誰もが経験する壁である。そして、おおかたの人はどちらかと言えば朋友という関係に批判的で、たとえばこのように言う。

「助け合うのもいいが、あくまで個人があつての友だ。自分の力で生きることが前提のはずで、べたべたと何で

もかんでも頼み事ばかりするのはナンセンスではないか」

何度となくこうしたことを言われたことがあって、それはそれで正論である。だが、朋友と友人の間に横たわる現実の壁とは、こうした意見に現れる建て前の論理ではない。そうではなくて、東京ではもはや「個人があつての友だ」とも言えないほどに希薄に陥つた人間関係、あるいはこうした意見を出してしまうことの根本にあるよそよそしさでも言うべきか、ともかく東京の街には、「個人があつての友だ」が空論にしか聞こえないような孤独が徘徊している。そのことをぼくは、東京で中国人に教わるようになる。

(麻生晴一郎『こころ熱く武骨でうざったい中国』による一部改変)

問一 傍線部に「友人と朋友の間にはいかんともしがたいほどの意味の違いがある。」とあるが、「友人」と「朋友」の違いを二百字以内でまとめなさい。

問二 「友人」と「朋友」のような外国語と日本語のずれについて、具体的な例を挙げて六百字以内で論じなさい。